
ホタルのニュースレタ

日本ホタルの会 2021/9 第 91 号

螢狩の唄を詠んだ一茶の俳句

螢文化誌研究家 後藤 好正

江戸後期の俳人、小林一茶には約 2 万 2 千の俳句（正確には発句）が残されていて、そのうち約 200 句にホタルが詠まれています。私は文化 11（1814）年に詠まれた

とぶ螢卵の殻をかぞへるか

という句についての解釈を、『一茶の発句「とぶ螢卵の殻をかぞへるか」考』として発表しました。この句は一茶が雄のホタルが雌を探してゆっくりと上下しながら飛ぶ様子を、何かを数えていると見立てて詠んだ句ですが、数えているものがなぜ“卵の殻”なのかについては定まった解釈がありませんでした。そこでこの句の“卵”について、実景句の可否ならびに生物学・文学・民俗学的検討を行いました。

その結果、実景句や生物学・文学に関連する句である可能性は低いという結論になりました。また、民俗学の民話や諺・謎でもホタルと卵の関連はうかがえませんでした。そうしたなかで、幕末頃に書かれた『守貞漫稿』という風俗百科に、京阪地方で「落ちたら玉子の水のまそ」と歌うわらべ唄（螢狩の歌）が記されているのを見つけました。一茶はあしかけ 7 年に及ぶ西国行脚の際、寛政 4（1792）年の夏は大阪周辺にいたので、そのさい耳にしたことが考えられます。さらに調査を進めると、長野県下高井郡に「螢来い宿かせる、山ぶし來い宿かせる、落ちたら玉子の水くれる」という唄が伝わっていたこともわかりました。伝承地の下高井郡は、一茶の故郷である上水内郡柏原村に近く、一茶がこの唄あるいは類歌を歌っていたことも十分に考えられます。螢狩の唄の他にはホタルと卵が関連する事例が見つからなかった以上、前出句の“卵”はこのわらべ唄の歌詞から採られた可能性が高いと思われます。

では“卵”がわらべ唄の歌詞からだとすると、この句はどのように解釈したらよいのでしょうか。ここで思い浮かぶのは、一茶の句の特徴として小動物や子どもなど弱者への愛情や同情を表したものが多いということです。よく知られた句にも「やれ打な蠅が手をすり足をする」「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」「瘦蛙まけるな一茶是に有」などの句があります。ホタルを詠んだ句のなかにも「二三遍人をきよくつて飛螢」のように、螢捕りに来た人の手や団扇の先を飛び去る様子を、まるでホタルが人をからかっているようだとホタルに肩入れした句があります。

このような視点から前出句を考えてみると、一茶がホタルの飛ぶ様子を何かを数えていると見立てた時、螢狩の唄から“卵の殻を数えている”と作ったと考えられます。ここには「落ちたら玉子の水くれる」とホタルを誘う言葉に騙されて、他のホタルが水を貰った後の卵の殻を探すホタルへの哀れみが感じられます。一茶には螢狩の唄に誘われるホタルに同情した「うそ呼としらずに行かはつ螢」「行な行なみなうそよびぞはつ螢」という句もあります。私はこの句を、「何かを数えているように飛んでいる螢がいるなあ。おまえは人がくれると歌う“玉子の水”が入っていた殻を数えているのか、そんなものあるはずないのに」と解釈したいのです。

さて、一茶には前出句以外にも螢狩の唄を踏まえて詠まれたと考えられる俳句がありますので、いくつか紹介していきたいと思います。ただし一茶には、門人可候が詠んだ「行螢あちらの水がうまひやら」のようなわらべ唄の文句取りの句はありません。

その
はつ螢其手はくはぬとびぶりや

の「其手」は螢狩の唄で呼び寄せようとする行為のことと考えられます。一茶は人を避けて飛ぶホタルを、その手には乗らないよ、とばかりにすいと逃げていると見ています。

江戸時代の俳諧には、螢狩の唄を歌ってホタルを誘う行為を「よぶ」と表現した「こいこいと呼べど螢がとんでゆく（鬼貫）」や「来ぬはずよ歯のなき口に呼螢（五明）」などの句があり、一茶も詠んでいます。

梟や螢ほたるを呼ぶように

は、フクロウの「ホー、ホー」という鳴き声を、螢狩の唄で多い歌い出しの頭韻「ほーほー」に掛けた句です。

螢よぶうしろにとまる螢かな

呼んでいる人の体の後ろに留まるなんて、まるで人をからかっているかのようなホタルです。

あちこちの声にまごつく螢哉

呼声をはり合に飛螢哉

「あちこちの」句のホタルは、あちらからもこちらからも聞こえる子ども達の歌声に、どこへ逃げようかとまごついてます。一方、「呼声を…」句では子ども達の呼ぶ声に捕まるものかと張り合って、いよいよ高くあるいは早く飛ぶホタルでしょう。同様の句に「あちこちに呼ばさまよふ螢かな（梅室）」「いふことのきこえてや高く飛ほたる（暁台）」があります。

わんぱくや縛れながらよぶ螢

悪戯をして柱に縛り付けられている腕白小僧ですが、日が暮れてホタルが飛び出すと、ホタルを一生懸命呼んでいる子どものたくましさを詠んでいます。

いも
妹が子やじくねた形りでよぶ螢

乳呑子や見よふ見まねによぶ螢

「妹が子や…」句の「じくねた」は「すねる」の俗語で、一生懸命呼んでも一向にホタルが寄ってこないので拗ねているのでしょうか。「乳呑子…」句は母親あるいは兄姉に背負われてやってきた乳飲み子が、他の子ども達のまねをして一生懸命ホタルを呼んでいる様子でしょう。いずれもまだホタルを探ることができない幼い子どもなので、一茶もほほえましく見ているようです。

行け螢とくとく人のよぶうちに

「人が呼んでいるうちに早く行け」とホタルに呼びかけるのは一茶の句としては少し異色です。「呼ばれるうちが花、さっさと行かないと誰も呼んでくれなくなる」というのは、ホタルに一茶自身を投影しているからなのでしょうか。

青柳ややがて螢をよぶところ

“青柳”は春の季語です。春になり川端で青々と葉を茂らせた柳の木も、初夏ともなれば子ども達がホタルを呼ぶところとなってしまいます。

念物の口からよばる螢哉

念佛は浄土系宗派で唱えられる「南無阿弥陀仏」です。一茶の故郷である柏原村は熱心な浄土真宗の地で、一茶も信徒でした。玉城司さんは『一茶句集(角川ソフィア文庫)』で、「崇高な念佛と子ども時代を思い出させる螢狩の呼び声が同じ僧の口から出てくる、そのずれが楽しく暖かい」と注釈しています。

私は一茶が来世を願って熱心に念佛を唱えながら、一方では楽しみのためにホタルを呼び寄せ捕まえるための螢狩の唄を歌うという人の性をみているように感じます。みなさんはいかがでしょうか。

一茶が螢狩の唄をふまえて呼んだ句はまだまだあります。ぜひみなさんも探してみてください。

本稿の詳細な論考ならびに引用した文献は、拙文『一茶の発句「とぶ螢卵の殻をかぞへるか」考』をお読みください（下関市立豊田ホタルの里ミュージアムのホームページから見ることができます）。なお、一茶の句は『一茶全集第一巻発句編』（小林計一郎編）から引用しました。

参考文献

後藤好正（2020）一茶の発句「とぶ螢卵の殻をかぞへるか」考. 豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書, (12) : 71-78.

2020 年度日本ホタルの会業務報告

日本ホタルの会の 2020 年度活動状況について、次のとおり、報告します。

1. 会の体制

(1) 会員数

2020 年度の会員数は次のとおりとなっています。

年 度	法人会員	公的会員	個人会員	計
2020 年度期首	1	3	5 1	5 5
2020 年度期末	1	3	5 0	5 4

(2) 役員体制

役員は、2020 年度に改選し、任期 2 年で運営を行っています。

名誉会長 矢島 稔

会 長 本多和彦

副 会 長 鈴木浩文

理 事 川村善治, 井上 務, 古河義仁, 渋江桂子, 後藤洋一
会 計 市川万里子
監 査 井上 務, 後藤洋一
事務局 井上 務, 古河義仁, 渋江桂子, 宇田川弘康, 後藤洋一, 大津順子,
市川万里子
事務局業務は、事務局に会長と副会長を加えた体制で進めています。

2. 財政及び運営

(1) 財政

日本ホタルの会は、会員の皆様の会費によって運営されています。2020 年度の会費収入は、245,000 円となっています。2020 年度は、2018 年度から行っているリソル生命の森の環境再生事業への協力等の調査協力に伴う入金があり、2020 年度は、合計で 108,808 円の収入となりました。これらの収入を加えた総収入は、364,810 円で、前年から 114,808 円の増となりました。リソル生命の森からの収入は、2018~2019 年度分で、協力を先行し費用の調整が遅くなつたため、2020 年の入金となつたものです。

一方、支出は、266,033 円となり、単年度収支でマイナスにはなりませんでした。全体として、979,762 円が、2021 年度への繰り越しとなります。主な支出としては、ニュースレター印刷が、121,000 円、郵送費 50,673 円、インターネット関連 61,406 円などとなっています。インターネット関連には、オンラインでの会議や講演会、談話会等を行うための z o o m の利用料が含まれています。それまでは、無料で使用できる範囲で利用していましたが、本格的にオンラインでの活動に取り組むため、有料契約を行つたものです。その他は、手数料、消耗品費等基本的なもので、支出はいずれも削減することのできない必要最小限のものと考えています。例年と同様の見解ですが、会員へのサービスを向上し、財政の安定化を図ることが必要と考えています。

近年、会員の減少が課題となっていますが、今年度は期間内の減少が 1 にとどまりました。しかし、会員数が以前に比べ減少していることに変わりないので、会員であることのメリットや充実感を感じられるような運営を考えいく必要があります。

また、今年度収支が改善した理由として「リソル生命の森」等に対する協力に伴う収入増があります。昨年も述べましたが、企業の求めるものと当会のコンセプトが一致し、良好な環境の保全・再生・創出等や地域の経済的メリット、

さらにはホタルによる感動を伝えられる場が提供できるのであれば、こうした連携を推進する意義はあるものと思います。当会の考え方をしっかりと伝えつつ、収入につなげることができればより有益であると考えています。2021年度から東京ガーデンテラス紀尾井町の再生水路に対する助言も行っています。今後も、コストを意識しつつ、他の団体との連携を進め、会の活動の活性化に積極的に取り組み、会の存在感を高めていきたいと考えています。

(2) 運営

当会の運営は、理事会及び事務局会議により行っていますが、コロナ禍の中なので、メールなどを適宜使用しつつ、オンラインによる会議のみを開催いたしました。

理事会 コロナ禍のため、理事会は開催しておりません。オンラインによる事務局会議での検討内容を周知いたしました。

事務局会議 オンラインにより開催

2020年8月2日、9月12日、10月17日

2021年1月17日、2月7日、3月14日 計6回開催

このほか、担当者の打ち合わせ、リソル生命の森との会議、東京ガーデンテラス紀尾井町関連の会議など、隨時オンラインにて実施しました。

3. 活動報告

主な活動として、会則に基づいて、ニュースレターの発行、ホームページによる情報発信、各種イベント開催、講師派遣を行っています。2020年度は、コロナ禍のため、ホタル観察会、日本ホタルの会シンポジウムについては、中止としました。コロナ禍の状況の改善が見込めないことから、オンラインによる談話会、講演会を企画し、試行錯誤がありましたが実施することができました。オンラインによる情報共有や意見交換の場を設けることは、コロナ対策であるとともに、日時の設定の自由度があることなど、来場が困難な会員の皆様にも参加いただけるメリットがあると感じました。コロナ収束後の活用も考えていくべき手段であると考えています。

(1) ニュースレターの発行

ホタルのニュースレター第 86 号、第 87 号、第 88 号、第 89 号を発行しました。

(2) ホームページ及びフェイスブックによる情報発信

ホームページは、当会の活動方針をはじめ、イベント案内など日本ホタルの会の情報を発信しています。

(3) イベント活動

観察会	中止
シンポジウム	中止
オンライン談話会	2020 年 11 月 28 日「アキマドボタル紀行」 講師 日本ホタルの会 宇田川弘康
オンライン講演会	2021 年 3 月 20 日「ホタルと恐竜」 講師 中部大学応用生物学部教授 大場裕一
講師派遣	なし（予定していた講師依頼がありましたが、コロナ禍のため中止になりました。）

(4) 調査・助言

リソル生命の森（千葉県長生郡長柄町）

コロナ禍のため、現地指導は 1 回にとどまりましたが、オンラインによる会議を 2 回開催し、アウトドア施設計画に伴うホタル生息環境の保全等について、提言をまとめ報告しました。

4. 2021 度の活動について

日本ホタルの会は、ホタルを里山の象徴と考え、ホタルの棲む豊かな環境を取り戻すという理念を発信するため、活動を続けてきました。基本的には、2021 年度もこの理念のもとニュースレターの発行、観察会、シンポジウム等を実施する予定ですが、新型コロナウイルス感染のまん延が続いている状況なので、観察会も含めオンラインによる開催を進めています。すでに、7 月に当会のメンバーが現地で撮影した映像を流す形で、オンライン観察会を行いました。実施に際し、映像がスムーズに動かないというような課題もありましたが、今後に向けた試みとして意義があるものになったと思います。今後予定しているシンポジウムなども通常の開催は難しいと考えていますが、オンライン

インなどを活用して、こういう時期だからこそ、多くの方々と情報を交換する機会を設けていきたいと考えています。さらには、オンラインが、遠隔地のみなさんにも気軽に参加いただける手法であることを、ポジティブにとらえ、有効に活用していきたいと考えています。

昨年も述べさせていただきましたが、こうした時こそ、ホタルをはじめとする自然の姿が多く人の心を癒し、安らぎや感動を与えてくれると思います。こうした自然の姿を会員の皆様とともに、発信していきたいと思います。

また、リソル生命の森等における調査・助言についても継続しますが、こちらも現地スタッフとのオンライン会議やメール等によるサポートを中心に展開していく方針です。

コロナ禍は、未だ収束が見通せない状況にあり、さらには、大雨など極端気象による災害も多発し、人の生活やホタルの住む環境にも大きな影響を及ぼしています。地球温暖化に伴う気候変動、そして生物多様性保全、この2つは最も重要な地球環境問題であり、気候変動は、生物多様性に大きく影響するものです。ホタルを大切にしていこうと考える私たちにとって、温暖化対策も、生物多様性保全も、一人ひとりが日々考えなければならないことだと思います。こうした認識のもと、日本ホタルの会は、これからもできることを積極的に進めてまいります。みなさまのご支援をよろしくお願ひいたします。

(会長 本多)

オンラインでの親睦会、観察会の報告

コロナ禍の中、当会もオンラインでの活動を進めています。ここのことろ、シンポジウムの後の懇親会もなくなりましたので、会員相互の親睦を図るために、6月12日にオンラインでの懇親会を開催しました。運営メンバーの紹介と今年度のスケジュール説明の後に、お酒を飲みながら参加者の自己紹介と会へのご意見やご要望などを頂きました。顧問の釜谷先生も交えて8名ほどの参加でしたが、2時間半ほど親睦を深めることができました。

観察会についても、現地での開催が難しいことから、7月10日にリモートで行いました。会員の宇田川弘康さんが7月に千葉で撮影したヘイケボタルの映像を見て頂きました。20名ほどの参加者でしたが、ヘイケボタルの映像

の解説と共に他のホタルの映像と、参加者の方々のホームページの紹介など、会員相互の情報交換も行いました。

談話会のお知らせ

オンラインでの談話会を開催致します。

日時：2021年9月11日（土）20時（午後8時）から1時間程度

講師：中島 久枝（日本ホタルの会）

内容：私たちの取り組み 一高知県香南市一

（地元のホタルの会の活動報告になります。）

Zoomミーティング：

<https://us02web.zoom.us/j/85919950198?pwd=ZEVRU0xTZWh5Vy9XMXptS2xzaXpRdz09>

ミーティングID: 859 1995 0198

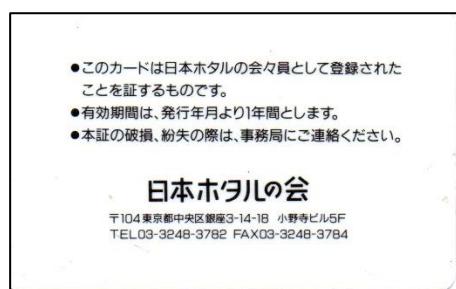
パスコード: 388716

電子メールにて、ご案内を差し上げます。皆様のご参加をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

会員証について

会員の方より会員証の発行についての問い合わせがありました。会の発足当初は、プラスチックのカードを発行しましたが、一度の配布で終わってしまいました。会員証の有効期限を1年間としていたので、毎年の発行には費用が掛かること、毎年送られてきても使う機会がないことなどからです。その後、紙での会員証を2-3年ほど再度発行しましたが、やはり同じような理由で続きませんでした。今回、事務局会で検討したところ、会員証は発行しないということになりました。



発足当初に発行された会員証（表と裏）

受贈會報

東京都町田市の「小山のホタルと自然を守る会」から会報の「片所の里通信 170号」を寄贈して頂きました。今年度のホタルの発生状況などが報告されています。ホームページ <http://www.oyama-hotaru.com/>

会員の方々が所属する団体の会報や近況など、ご紹介したいものがありましたら、事務局までご連絡下さい。会員相互の情報交換にもなりますので、ニュースレターで報告していきます。よろしくお願ひ致します。

コロナ禍が続く中、オンラインによる活動を継続しています。6月12日に懇親を兼ねた意見交換会、7月10日には観察会を実施しました。運営会議は、毎月1回開催し、談話会、講演会及びシンポジウムの開催についての検討やホームページを活用したサービス向上方法、運営体制の改善などを話し合っています。こうした状況が、しばらくは続くと思いますので、そうした時にもより良い活動ができるよう考えて行きたいと思います。

ホタルのニュースレター（第91号）

2021年 9月20日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒239-0824 神奈川県横須賀市西浦賀4-11-2-404

本多方（日本ホタルの会事務局）



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

e-mail: hotarunokaijimukyoku@gmail.com

URL : <https://www.nihon-hotaru.com>

Facebook: <https://m.facebook.com/nihonhotaru/>

印刷 青森コロニーリントン 東京都中野区江原町2-6-2